

## 特別連載寄稿「健康、心、薬」第十五弾

●千葉大学名誉教授、薬学博士 佐藤 哲男氏 寄稿

### ▼第16話 「ど忘れ」と認知症は別もの

高齢になるとだれもが物忘れに悩まされます。自分で眼鏡をかけたまま眼鏡をさがすとか、用事があって二階に上がった途端に用事を忘れたとか、冷蔵庫を開けたとたん何を取り出すのか忘れた、などは誰でも日常経験することです。この程度の物忘れでしたら心配いりません。高齢者が誰でも経験する単なる「ど忘れ」です。「今朝なにを食べましたか」と聞かれて、「さて何だったろうか」と考え込むうちはまだ正常です。単なる老化による「ど忘れ」です。最近の事を聞かれて思い出せないときでも、「そのとき一緒にいた人」とか、「その日は何日だった」とか、何か関係づけるヒントで思い出せば問題ありません。心配なのは、「今朝食事をしましたか」とか、「今朝何時頃起きましたか」などの質問に対して、すぐに答えができないときです。

私どもが毎日記憶する新しい出来事は、脳の中の「海馬（かいば）」という場所に収納されます。この場所では、一か月前、一週間前、昨日、今日などの新しい記憶が送り込まれます。海馬の收容能力には限界があるため、空席がないと新しい情報を記憶する事ができません。そのために適当に物忘れすることが必要です。これまで経験した事をすべて記憶したら生きているのがいやになります。嫌な経験や記憶は脳が自動的に忘れさせてくれるのです。一回きりの記憶はやがて海馬から消え去ります。多くの情報の中で、どうしても記憶したい場合は、何回も繰り返して海馬に送る事によりそこに刷り込まれます。この様にして刷り込まれた記憶は、やがて「側頭葉」という場所に移動してそこに永久保存されます。側頭葉に移された記憶は時間が経っても簡単に消えることはありません。さらに、もっと古い記憶は「側頭葉」から「頭頂葉」に移され、ここで永久保存されます。つまり、馬海に蓄えられる記憶は、「当座預金」のようなもので出入りが頻繁ですが、「側頭葉」や「頭頂葉」に蓄えられた記憶は「定期預金」の様なもので、自分で消さない限り永久保存されます。高齢になると、子供のころのことや、小学校での生活などは鮮明に記憶しています。これは、昔の記憶が永久保存されている証拠です。

認知症はその原因により2種類に分けられます。一つは、脳出血や脳梗塞など脳血管障害による忘れです。もう一つは、高齢者にみられる「アルツハイマ

一型」です。最近は40代、50代で見られる「若年性認知症」の患者が増えています。血管障害による認知症は、原因となった病気を治療することによりかなり回復しますが、アルツハイマー型認知症はその原因がよくわからないのもっと深刻です。一般に言われている原因は、脳内に「アミロイドベータ」という特殊なタンパク質が増えて、それにより「老人斑」というシミが脳の中のできるためといわれています。しかし、それ以上の詳しいことはわかっていません。アルツハイマーの患者の特徴は、新しい記憶を司る海馬の細胞が壊れるため、今朝の出来事や、いま直前の記憶を思い出す事ができません。それとは逆に、側頭葉や頭頂葉に蓄えられた昔の記憶は永久保存ですのでよく覚えています。

アルツハイマー型認知症はその進行が速いので、治療せずにそのままにしておくと、一年後には別人と思われるほど病状が進行します。今のところこの病気を完治する薬はありませんが、初期のアルツハイマー型認知症の患者の進行を止める薬として、日本の製薬会社のエーザイが開発した「アリセプト」が世界的に使われています。もし、高齢の方で最近どうも言動が変だと思ったらできるだけ早く治療を受けることをお勧めします。

**\* 特別連載寄稿「健康、心、薬」第十五弾に続く！！**

